

令和7年度 ふくしの作品 入選作品決定！

～この事業は「赤い羽根の共同募金」の配分金により行っています～

みなさんから、あたたかい気持ちのこもったすてきな作品がたくさん届きました！ありがとうございました！



募金箱デザイン画 部門
小学生(低学年)の部 最優秀賞
泉川小学校 2年 松尾 笑奈



募金箱デザイン画 部門
小学生(高学年)の部 最優秀賞
角野小学校 5年 高橋 癒夢



福祉作文 部門 中学生の部 最優秀賞
小さな親切

中萩中学校 2年 保利 朔真

僕が福祉について初めて深く考えるようになったのは、学校の総合学習の時間がきっかけでした。「福祉とは何かを調べよう」というテーマで授業が始まり、クラスで調べ学習をしたり、地域の施設について話し合ったりしました。でも、正直なところ、最初はあまり実感がわきませんでした。「高齢者や障がいのある人のための支援」と言われても、どこか他人事のように感じていました。そんな僕の考えが変わったのは、一つの体験からでした。

夏休みのある日、祖母の家に遊びに行った時のことです。近くのスーパーと一緒に買い物に行くことになり、僕は祖母の荷物を持ちながらついていきました。買い物が終わって店を出ると、目の前で白い杖を持ったおばあさんが道の真ん中で立ち止まっていました。どうやら道に迷っているようで、不安そうな顔をしていました。僕は少し迷いました。「声をかけてもいいのか？ 逆に迷惑じゃないか？」という気持ちがありました。でも、祖母がそっと僕の背中を押して、「声をかけてあげたら？」と言いました。勇気を出して「大丈夫ですか？」と声をかけると、そのおばあさんはほっとしたような表情で、「駅まで行きたいんだけど、道がわからなくなってしまって」と答えてくれました。僕は祖母と一緒に、おばあさんを駅まで案内しました。おばあさんは「ありがとう、助かったわ」と何度もお礼を言ってくれました。そのとき、僕は「福祉って、こういうことなんじゃないか」と思いました。

福祉というと、特別な資格を持った人だけがする仕事だと思っていました。でも、自分にもできることがあるし、誰かを助ける気持ちや行動そのものが福祉なのだと気づきました。ちょっとした声かけ、手助け、気づかい。そういう「小さな親切」こそが、社会を優しくする力なのだと思います。

この体験をきっかけに、僕は学校の清掃活動や募金活動にも、今まで以上に前向きに取り組むようになりました。掃除をするときも、「誰かが気持ちよく使えるように」と考えるようになったし、募金を呼びかけるときも、「困っている誰かの力になる」と思うと、自然と声も大きく出るようになりました。

福祉とは、特別な人のためのものではありません。子どもも大人も、健康な人も体の不自由な人も、みんなが関係しているものです。そして、それを支えるのは一人ひとりの思いやりの心です。僕にもできることがあると分かったことで、これからの行動にも少し自信が持てるようになりました。

将来、どんな仕事に就くかはまだわかりません。でも、どんな仕事でも、どんな場所でも、人の役に立つことができる人でいたいと思います。そして、自分がされた親切を、次は誰かに返していけたらいいと思います。これからも、小さなことでも「誰かのためにできること」を見つけて行動していきたいです。それが福祉の第一歩だと、今は思えるようになりました。